

現代青少年の文化と意識（４）—メディアと生活の相互関係の変容

桃山学院大学 阪口 祐介

1 目的

本研究の目的は、メディア環境が大きく変容した 2002 年から 2012 年までの 10 年間で、メディア利用と友人関係・意識の関連性がどのように変化したのかについて実証的に明らかにすることである。2000 年代は若者におけるメディア環境が大きく変容した時代だといえるだろう。テレビ視聴時間は減少する一方で、携帯電話利用は中学生や高校生といった若年層へと普及していき、携帯電話を通じたインターネット利用が一般的になった。他方、これまで多くの研究がメディア利用と人間関係・意識の関連性について探究してきた。たとえばそれらの研究は、テレビ視聴と社会関係資本、インターネット利用と孤独感、CMC と多元的自己志向、携帯電話利用と友人数・友人志向など、メディア利用と人間関係・意識の関連性について理論的考察や実証分析を行っている。本研究の問題関心は、既存の研究が探究してきたメディア利用と人間関係・意識の関連性が、この 10 年間のメディア環境の変容のなかでどのように変化しているのかということである。たとえば先行研究では、携帯電話利用頻度が高いほど友人数が多く、より広い友人関係を志向することが示されているが、こうした関連性は、友人とのコミュニケーションが活発な青少年期に携帯電話が普及した環境ではさらに強化されることも予測できる。本報告では、メディアとして、テレビ視聴時間、携帯電話通話時間、携帯メール数、携帯からのインターネット利用時間、パソコンからのインターネット利用時間を取り上げ、人間関係・意識として、友人数、友人志向、多元的自己、孤独感を取り上げる。そして両者の関連性がどのように変化したのかについて仮説を立て検証を行う。

2 分析方法

2002 年と 2010 年に青少年研究会が実施した調査を用いる。分析対象は 16 歳から 29 歳である。はじめにメディア利用頻度やメディアに関する意識についての度数分布を示し、時点間の変化を確認する。次に相関分析を行い、第一にメディア利用の関連性の時点間変化を、第二にメディア利用と人間関係・意識の関連性の時点間変化を示す。

3 結果

第一に、メディア利用頻度の時点間変化については、テレビ視聴時間と携帯通話時間は減少し、インターネット利用時間が増加していた。また、メディアに関する意識項目を比較すると、携帯電話やインターネットを介した出会いや友人作りを経験した人の割合が増加していた。

第二に、メディア利用の関連性の時点間変化については、2002 年では見られなかったテレビ視聴時間と携帯電話利用（メール数、インターネット利用時間）の関連性が浮上していた。テレビ視聴時間は低下しつつあるが、テレビ視聴と携帯電話利用との親和性は強化されていることがわかる。一方、パソコンを通じたインターネット利用と他のメディア（テレビ視聴・携帯電話利用）との負の関連が浮上していた。

第三に、メディア利用と友人関係・意識の関連性については、この 10 年間で、携帯電話利用と人間関係・意識の関連性が全般的に高まっていることが明らかになった。2002 年でも携帯メール利用頻度と知り合い程度の友人数のあいだに関連性は見られたが、2010 年ではさらに親友数との関連性が見られるようになった。そして、携帯電話利用（メール数・通話時間）と友人関係における遠心志向、求心志向、孤独回避志向の関連性が強まっていた。また、携帯からのインターネット利用時間と多元的自己や孤独感との関連性も確認できた。当日はこれらの結果について考察する予定である。